

デア・シュトリッカーの『閉じ込められた女房』について

——物語の重層構造の目指すもの——

千 田 春 彦

1.

中世盛期の宮廷文学がその盛りを過ぎてやや翳りを見せ始める十三世紀前半、文学の舞台に新しいジャンルとして登場し、中世後期における最も活力溢れるジャンルのひとつとなったのが《小話》(Märe)であった。¹⁾形式的には二行ごとの対韻を、内容的には世俗の事柄をあつかうフィクションであることを特徴とする。²⁾最も長いもので二千行、多くは百五十行から数百行ほどのうちにおさまるこれらの作品は、ときどきの求めに応じて炉辺の楽しみに語られた。聴衆の中核を成すのはこの時代に力を伸ばしてきた市民層であり、物語の舞台も都市や農村の日常生活の場にもとめられることが多い。旧来の騎士身分に強く結びついた理想主義的文学と違い、小話は人間から身分的拘束のころもを剥ぎ取って人間そのものに目を向ける。³⁾

ドイツにおける小話文学の創始者として活躍したのが、デア・シュトリッカー(Der Stricker)であった。市民出身の放浪詩人である彼は、1220年から1240年代にかけておもにオーストリアを創作の舞台とし、1250年頃に没した。活動の初期におけるシュトリッカーはいまだ盛期中世の文学的土壌に根ざして、司祭コンラートの『ローランの歌』の改作(『カール』)やハルトマン・フォン・アウエの『イヴェイン』に範をとるアーサー王物語(『輝ける谷のダニエル』)の創作に手を染め、その過程で宮廷文学の洗練された文体、とくに対韻による詩作の技法を磨きあげた。だが、題材こそ伝統的なものであれ、その基本的創作態度には既に騎士道精神とはまったく異質なものが認められている。やがてそれは、ティル・オイレンシュピーゲルの先達として広く知られている『司祭アーミス』や、多くの小話作品の中で開花することとなる。⁴⁾

デア・シュトリッカーの小話作品に描かれるのは、多くは市井の人の日常の生活場面であり、物語は一般に人間としてその人物に備わる賢明さや愚かさといった性質を主たる関心事として展開する。⁵⁾ そうした人間一般のかかえる問題としてデア・シュトリッカーが好んでとりあげるテーマのひとつが、『閉じ込められた女房』(Die eingemauerte Frau) という作品にも描かれるところの、夫婦の間での争い事である。妻を虐待する夫、逆に夫をやり込める妻、およそ夫婦の間に生ずる争い事の数々を、デア・シュトリッカーは描いて見せる。さながらそれらは当時の庶民の日常生活を映す鏡のようですらある。⁶⁾

『閉じ込められた女房』のほかに同様のテーマを扱うデア・シュトリッカーの作品としては、『強いられた誓約』『離婚談判』『埋葬された夫』『熱鉄』『丸太ん棒』などがあるが、⁷⁾ それらと比較してみると『閉じ込められた女房』という小話は、その構成上、一つの特徴をもっている。それは先取的にひとことで表現するなら《物語の重層性》とでも呼ぶべきものである。果たしてそれがいかなる性質のもので、その背後に作者のいかなる意図を読み取るべきなのか、まずは、必要に応じて他作品との比較を交えながら、『閉じ込められた女房』の語るところをつぶさに辿ってみることとしたい。

2.

テキストはちょうど400行からなり、200行ほどを平均とするデア・シュトリッカーの小話作品のなかでは長い部類に属する。内容的に、大きく三つの部分に分けることが可能である。第一部(1～35行)ではまず、登場人物が設定され、物語の発端となる問題状況が描写される。

Ein ritter tugende rîche	徳操高きさる騎士が
nam ein wîp êliche.	とある女を妻とした
dô wolde si ir willen hân	これがひどい我がままで
und des sînen niht begân.	亭主の言うことを聞こうとせぬ
5 daz mohte er niht erlîden	堪忍袋の緒も切れて
und hiez siz gar vermîden.	こころ改めよと説く夫
dô si durch vlêhen noch durch bete	拝まんばかりに頼んでみても

- | | |
|--|---|
| <p>deste baz noch deste rehter tete,
 dô drôuwete er ir sêre;
 10 dô drôuwete si im noch mêre.
 er sluoc ir einen vûstslac.
 er sprach: „nu ist mir umbe den sac
 als mære sam umbe daz sacbant!“
 er brach ir abe ir gewant.
 15 einen swæren knütel er gevie;
 sînen zorn er si enpfînden lie.
 er sluoc ein lange wîle
 mit kreften und mit île,
 unz im der arm tet sô wê,
 20 daz er niht slahen mohte mê
 und ir ein sîte alsô zebrach,
 daz man niht anders dâ ensach
 wan zebrochen hût und bluot.
 er sprach: „woldet ir noch wesen guot!“
 25 si sprach: „wie wære mir des sô gâch?
 weiz got, ez ist vil unnâch.
 ir müezet noch langer bîten.
 nu bin ich doch zuo drîn sîten
 noch ungerüert und ungeslagen.“</p> | <p>妻の行いあらたまらず
 ならばと妻みをきかせてみるが
 妻みは女房が一枚うわ手
 夫はついに手を上げた
 「坊主憎けりゃ袈裟まで憎い
 お前の着物もこうしてくれる」と
 女房の着物を剥ぎ取るや
 重い棍棒をひっ掴み
 怒りのたけを思い知れと
 力のかぎり矢継早に
 騎士は女房を打ち続け
 ついには腕が痛くなり
 もう殴れなくなる始末
 女房の脇腹はひどく裂け
 迸りでる血しぶきが
 傷のまわりを覆いつくした
 「それでも行い改めぬか」
 「寝ぼけておいでかお前様
 これしきのこと痒くもない
 もっと叩いておくんない
 こうして身体のあちこちが
 無傷のまんまなんだから」</p> |
|--|---|

冒頭の二行が簡潔にこの物語の主たる登場人物二人を導入する。小話の場合、主人公は農民や商人であったり、あるいはまた何ら明確な身分設定をされないことも少なくないが⁸⁾、ここでの主人公は騎士の身分に設定されている。また、ここで使われている「徳操高き (tugende rîche)」という形容は、のちに物語の進展の中で用いられる「有能」「賢明」⁹⁾といった語彙とならんで、かつての騎士文学の中で理想的騎士像を構成する不可欠の要素として常套句的に用いられたものであって、これだけを見る限りあたかも宮廷を舞台とした立派な騎士の華やかなる物語が始まるかのような印象さえ与える。

しかし、つづく二行は、物語の焦点が従来の文学とは違って、騎士のおおやけ

の生活、その武芸や冒険、あるいは宮廷での華やかな恋愛ではなく、むしろそのもっとも私的な生活、すなわちその妻との間の問題に向けられることを告げる。その表現はいたって簡潔にして抽象的である。妻の振舞いが具体的に描写されることはない。だが、《dô wolde si ir willen hân / und des sînen nicht begân》というこの簡潔な表現のなかには、この時代における女性の地位や夫婦の力関係の根本問題が内抱されている。

ゲルマン法のもとでは、女性は結婚によって生家での父親の保護と支配（Munt）を離れ、夫のそれのもとへと移行した。¹⁰⁾ 妻に対する夫の支配権の根拠の一つがここにある。また、一方、キリスト教会の教えにあっても、夫への服従は神への服従と同様に繰り返して説かれていた。

Dô unser herre des aller êrsten die ê satzte in dem paradise mit Adâme unde Êven, dô satzte er, daz diu frouwe dem manne undertænic wære unde der man der frouwen hêrscher wære. ¹¹⁾

樂園においてアダムとイヴのあいだに初めて結婚を定められたとき、われらが主は、妻は夫に服従し夫は妻の支配者たるべくお定めになられた。

これは、デア・シュトリッカーとはほぼ同時代に名説教僧として名をはせたフランススコ会の修道士、ペルトルト・フォン・レーゲンスブルクの結婚に関する説教の一節である。

デア・シュトリッカーの他作品にも同じ趣旨の言葉が見出される。

『埋葬された亭主』は、女房を溺愛する余り、お前の言うことは何でも信じると約束した夫が、ついには「おまえさんはもう死んでいる」という女房の言葉を無理矢理信じさせられて生き埋めにされてしまう話であるが、その結びの言葉にも、夫が支配者で妻がそれに服従するのが本来の姿であることが前提されている。

Den schaden muose er des haben,	こんな目にあわされたのも
daz er satzte ein tumbez wîp	馬鹿な女房の言いなりになり
ze meister über sînen lîp.	(V. 246f.) 支配者の座をあげ渡したため

さらに『悪妻について』という教訓詩あるいは説教のような趣の作品¹²⁾でも、

「自分が支配者たらんとするのが悪い女房のしるし」(V.109f.)であるとしたうえで、そうした女房たちの行状を暴き出す。曰く、悪い女房と言うものは夫の亡きあととできるだけ多くの遺産を手にして、自分の気に入った若い男と楽しくやるために、一方では夫の財産を隠匿することによってその目減りを防ぎ、それによって夫が手元不如意となって世評を落としても意に介さず、また他方、一日も早く夫を厄介払いするために、わざと誰かれとのあいだにいさかいの種を蒔いて夫が殺されることを画策するといった有様である、等々。

このように、「これがひどい我がままで…」という三、四行目の簡潔な表現は、夫への服従という妻としての第一義務を拒む当時の典型的悪妻像を指し示すものであり、聴衆は、あらためて具体的な描写をまつまでもなく、この妻の振舞いを容易に脳裏に思い浮かべることができたに相違ない。

妻の行いが気にそまぬこの騎士は、まず言葉による説得を試みるが、それがうまく行かないと見るやたちまち暴力に訴えることとなる。たとえ暴力に訴えでも妻を従わせることは、当時、夫の権利であるばかりか、義務ですらあるとされていた。小話作品の中でもこの種の暴力場面(Prügelszene)は重要な構成要素のひとつになっている。聴衆の期待にたがわぬ筋の展開といえよう。しかし、その描写そのものはほんの十数行のうちに済まされてしまっている。ここでもシュトリッカーは、当時流行の夫婦喧嘩ばなしの典型に則って、必要最小限の表現で、いわば手順通りに物語の設定をすすめているように見える。聴衆との共通理解を前提に、物語は淡々と語り始められたと言っていいたいだろう。

3.

血の出るまで殴りつけても妻は一向に反省の色を見せず、夫に毒づくばかりである。そこで夫は、暴力とは別的手段に出ることを思いつく。それが第二部(36～108行)である。ここからがこの作品独自の展開となるわけで、『閉じ込められた女房』という今日われわれがこの作品を呼ぶときの表題もそこに由来している。¹³⁾

36 Dô hiez er müren ein gaden.
daz wart gemachet âne tür;

そこで夫は小屋を作らせた
出入口のないその小屋は

ein venster kërte er her vür.
dâ wart si inne vermûret.

窓が一つあるばかり
女房はそこに閉じ込められた

「小屋」と訳した *gaden* は、一般に閉鎖空間を意味し、通常ひと部屋からなる木造の粗末な建物を指す。¹⁴⁾ 屋敷の中庭にでも建てたのであろう。隔離のための空間である。男は女房をそのなかに閉じ込め、第一に「犬にでも投げ与えるような」(V. 50) ひどい食事で女房を苦しめ、第二に何を言ってもそれを黙殺して女房を孤独に陥れる。さらに、一つだけ開いて外界とつながる窓を彼は次のように利用する。

er saz ouch, dâ si in wol sach,
sîne vröude und sîne wirtschaft.
er hâte der liute grôze kraft;
den liepte er leben unde lîp.
60 er satzte ein minniclichez wîp
an sîne sîten alle zît.
scharlât unde samît,
daz beste, daz er veile vant,
daz was ir tæglich gewant.
65 die halste er unde kuste,
als vil in des geluste,
daz ez diu hûsvrouwe anesach.
swaz ir dâ leides von geschach,
daz lie der wirt âne nît.
70 er was mit vröuden alle zît.
sîn lop was von der werlde breit.

女房によく見えるところで
夫は飲めや歌えの大宴会
大勢の客を招いては
大判振舞いでもてなした
そばには可愛い女をひとり
片時おかずはべらせた
上等のウールやビロード
手に入るかぎりの品々が
日々その女の身を飾る
思う存分抱き寄せては
熱い接吻をくり返し
しかと女房に見せつけた
女房の辛い気持ちなど
亭主は一向にお構いなし
楽しい宴を張りつづけ
世間もそれを褒めあげた

隔絶しつつ連絡する、窓というものの持つこの二重性をデア・シュトリッカーは見事に見抜き、女房を懲らしめる夫の有力な武器としている。それにしても、客に対する大判振舞い、いわゆる「気前のよさ」*milte* はたしかに、伝統的に騎士の美德の一つと位置づけられるものであり、それゆえにこそまた、この男も「世間」の賞賛を浴びることになっているのではあるが、傍らに女をはべらせて殊更

にいちやついてみせるとなると、これは、騎士身分とは何ら関わりのないこと。むしろ聴衆の誰しもがここに潜ませている願望をくすぐると同時に、誰しもが心の底に秘めつつあさましさを暴き出してみせるシュトリッカーの毒気のようなものを感じずにはいられないくだりである。

つぎに夫は妻の親族に対する対応に乗り出す。

72 Er schuof mit sîner vrûmekeit,	騎士は有能ぶりを発揮して
daz er ir mâge niht entsaz.	女房の親類を手なづけた

ここで話題が女房の親族におよぶのは、今日のわれわれの目にはいささか唐突に映ると言わねばならない。しかし、教訓詩『悪妻について』のなかでデア・シュトリッカーは、自分より高い家柄の娘をもらった夫は、妻の言い分に逆らえばその親類の手で殺されるかも知れないという危惧を抱くという趣旨のことを述べている（V. 540ff.）。また夫婦の間に何か揉め事が起こると双方の親族が呼び集められる様は『強いられた誓約』をはじめ他の作品にも描かれている。前述のごとく女性結婚によって生家の父親のムントを離れているとはいえ、親族共同体の結びつきがきわめて強固で、その構成員に対する攻撃は加害者及びその一族に対する一族を挙げてのフェードと血讐をよびおこす習わしであったこの時代¹⁵⁾、それに対する予防策を講じることは今日では考えにくいほどの重要性をもつことであった。その際の手腕、如才なさが「有能」という騎士に贈られる典型的賛辞のひとつを以て表現されることも注意しておくべきであろう。

さて、ここにいたって妻の心に小さな動揺が生まれる。

dô was der wirt sô stæte,	夫の心の堅いを見て
daz diu vrouwe ein teil verzagte.	奥方の心に不安が兆す
dô si ir vriunden klagte	親族の者を呼び寄せて
die vancnusse und die smâcheit	囚われの身の屈辱と
80 und den gebresten, den si leit,	衣食の乏しさを訴えた
dô sprâchen si: „wir wizzen wol,	応える親類「われわれも知っておるぞ
daz ir der übele sît sô vil,	お前が重ねた悪行のかずかず
daz er iu niht wan rehte tuot.	婿殿の処置は尤も至極
ir sît vil übele gemuot;	お前はこころ根の悪い女

85 des hât ir lôn enpfangen.
ez ist iu rehte ergangen. “

その報いを受けたまで
当然の成り行きというものだ」

夫の決意の堅さと周到な事の運びに「不安」になり、自分の親族の力による救済に期待を寄せる妻であったが、事は既に手遅れ、親族の反応は冷たい。夫は妻の親族にたっぷり贈り物をして、自分の味方につけてしまっていたのである。尚も彼女の懇願を受けた親族のものが夫のもとに相談をもちかける場面のやりとりがある。彼女を解放するように頼みに来た親類に夫は言う。

90 „ich bin iuwer rede vil vrô.
ich leiste iuwer bete und iuvern rât.
welt ir mir setzen, swaz ir hât,
ob si ein übel wîp welle sîn,
daz iuwer guot sî allez mîn,
95 sô lâze ich si her ûz gân
und enpfilhe ir allez, daz ich hân. “
„nein ich“, sprach er zehant,
„mir ist ir muot wol bekant.
ichn wil ez niht sô sêre wâgen. “
100 sus schuof er mit ir mâgen,
daz si die bete alle liezen.

「ご忠告まことに痛みいります
仰せのとおりに致しましょう
もし妻が悪さを重ねたら
あなたの全財産は私のもの
そう約束してくださるなら
妻を外へ出してやり
全財産を委ねましょう」
「御免被る」と即座の返事
「あ奴の心は見えている
そんな賭けは御免被る」
かくして夫の思惑どおり
親類の口出しはなくなった

相手を怒らせることなく、むしろ相手のほうから尻ごみするようにもっていく口八丁ぶりは、この作品を通じてもっともひねりの効いた台詞のひとつとして、物語の娯楽性にも寄与している。

こうして、親族の介入も夫に阻止され、妻はいよいよ出口のない状況に追込まれるのである。この第二部を108行目はこう締めくくっている。

dô wart si alters eine.

そして女房は孤立無援と相なった

さて、この108行目までで、物語は一応の完結を見せている。第一部は極めて簡潔ではあるが問題のありかを明確に聴衆に提示し、第二部では、小屋への閉じ込めというこの作品独自の展開を導入、窓を駆使した見せつけ作戦や巧妙な親族対策など、それなりの娯楽的要素を交えつつ、女房を孤立無援の絶望的状况に追いやることに成功している。デア・シュトリッカーの他の小話においてはここで一話完結となるのが普通である。

『埋葬された夫』では、墓穴に放りこまれてやっと騙されたことに気づいた夫は、大声で泣きわめいて助けを求めるが、女房とその情夫たる僧侶の「あれは悪魔の叫びだ」のひとことで周囲のものの助けも得られず惨憺な最期を迎える。『熱鉄』では夫の浮気心を疑って灼熱した鉄を素手で握る神明裁判をもとめた女房が、巧妙にその危機を逃れた夫に今度は逆に熱鉄を握らされて大火傷を負う。前者では女房恋しさの余り何でも言いなりになると約束した愚かな夫が、後者では愚かな嫉妬心を起こして夫に無理な要求をした女房が、それぞれその愚かしさの報いをうけるのであるが、それを描くデア・シュトリッカーの筆には一片の仮借も感じられない。救いようのない愚かしさがまねいた悲惨な帰結が淡々たる語り口で聴衆に突き付けられるばかりである。あとは聴衆の一人一人がそこから教訓を引き出すことが無言のうちに要求されるのである。

ところが、『閉じ込められた女房』では、109行目以降の第三部で、物語全体の約四分の三を費やして、いわば《第二の物語》が語り継がれていく。女房が前非を悔い改心を遂げるのである。

- | | |
|---------------------------------------|---------------|
| Dô wart der vrouwen gesaget, | 味方と頼む者たちが |
| 110 daz alle die wären gedaget, | 揃って口をつぐんでしまい |
| die ir dô helfen solden | 助けてくれそうにないことが |
| und ir niht mê helfen wolden. | 女房の耳にいれられた |
| dô si vernam den untrôst, | 二度と外へは出られぬと |
| daz si niemer würde erlöst, | 悪しき知らせを受け取るや |
| 115 dô vuoren die tîvel von dem wege, | 取り憑いていた悪魔らも |
| die si hâten in ir pflege. | 女房を離れて飛び去った |

dô quam der heilige geist
und brächte ir sînen volleist.
ir grôziu übele diu verswant.
120 dô viel ir hôchvart zehant.
ir übele und ir böeser muot
diu zergienge, si wart alsô guot,
daz si mit rehten triuwen
ir sünde begunden riuwen.

そのとき聖霊が現れて
女房に加護をもたらした
悪しき心は雲散し
高慢の心も霧消した
悪しき心は潰え去り
心あらためた女房は
心の奥底深くから
犯した罪に悔いいった

親族の助力による事態解決の望みが断たれたということが、改心のきっかけとなっていることは確かである。しかし、注意しなくてはならないのは、その間に「悪魔」と「聖霊」の交替という、第二部までにはまったく見られなかったキリスト教的要素が介在していることである。さらにこれを含めた三つの事象、絶望的状况、「悪魔」と「聖霊の」交替、改心の三者の間の相互関係が問題となる。

テキストによれば、絶望状況と悪魔・聖霊の交替との間にあるのは、三つの《dô》によって表される《同時性》の関係でしかない。望みが断たれた《ときに》悪魔が去っただけであって、両者の間に厳密な意味での因果の関係はみとめられない。ひとを悪に誘うのが悪魔であるとするなら、その人間がたとえ絶望的状况に追込まれたとしても、むしろそれは悪魔の意図するところでこそあれ、誘惑をやめる原因となるべきいわれはないはずである。

他方、悪魔・聖霊の交替と改心との関係は、完全に等価の扱いを受け、ふたつの別々の事象とは見做されていないかのようなのである。それゆえにまた、女房の改心のありかたも、悪から善への階梯をひとつずつのぼる段階的なものではなく、悪魔が去り聖霊がやってきたその瞬間に悪から善への百八十度の転換が一挙に完結する。

ここに近代以降の文学の描写とはまったく異質なものが顔を覗かせていることに気づくであろう。個人の心理の分析、その行為の心理的動機づけ、こうしたいわばリアリズムがそこには欠如しているのである。この問題については後にもう一度触れることになる。

以下の300行弱を費やして作者デア・シュトリッカーは、この女房の改心が如何に徹底したものであり、その後の彼女がいかにすばらしい善良な人間になったかを描き続ける。そこには宗教の色が深くたちこめる。さきの引用にすぐつづく

箇所、改心後の女房がなによりも先にしたことは「司祭」を呼びにやることであった。

125 dô sande si nâch dem paffen	女房は司祭に使いをだした
und wolde ir dinc schaffen,	命の果てるそのときに
swenne ir der lîp erstürbe,	魂の救いを得られるよう
daz diu sêle niht verdürbe.	手立てを講じておくために

女房の関心は、いまや現世を離れ、死後の魂の救済に向けられている。みずからを「かつてこの世に生まれたもっとも罪深い女」(131f.)と呼ぶ女房は、魂の救済を受けるための「助力」と「助言」を司祭に求める。それに対して司祭ははじめ「いままでの悪い行いをやめて、善い女になるように」と一般的な助言をするが、女房は「悪い心はもう神様に取り去ってくださいました」と答えて、このちぐはぐなやりとりは、彼女の改心が既に一瞬にして完了してしまっていることを際立たせている。女房の深い改心を知った司祭は夫のもとへ行き、女房を赦してやるように説くこととなる。

しかし、そもそもここで司祭という人物像が登場することは、デア・シュトリッカーのほかの小話作品の中で聖職者たちが演じている否定的役割(例えば『埋葬された夫』における女房の浮気の相手など)を考えると、ある特別な意味をもつものと言わねばならない。悪役を担わされることの多い聖職者を、ここにかぎって、そのまっとうな職務遂行の姿で描くことに何らかの必然性があるとすれば、それは Brietzmann が指摘する通り「女房の罪の告白があまりに重大であるために聖職者の助言なしでことを済ませることは困難であった」¹⁶⁾ という点あたりに求められよう。だが、この司祭の役割は、せいぜいのところ女房と亭主の橋渡し程度のものであって、女房の改心の根底とは本質的には無関係である。司祭の登場は物語に宗教的色彩を付け加えつつ、改心のありかたが人為を超えた絶対性をもつものであることを際立たせる結果となっているのである。

いまだ女房の改心に半信半疑の夫に対し、悔悛の情を吐露する女房の言葉は思わぬ展開を見せる。

nu erbarmet iuch, herre, über mich	私を憐れみお恕し下さり
215 und vergebet mir, daz iu got vergebe,	あなたも神の恕しをお受け下され

und lâzet mich die wîle ich lebe
hie suochen gotes hulde
umbe unser beider schulde.

そして生きてこの世にあるかぎり
この小屋の中にとどまらせ
二人の罪を償わせてくださいまし

改心したから外へ出してくれというのではない。女房のもとめるのはひたすら神の恕であり、そのために小屋の中の苦しみを一生のあいだ贖罪のために受け続けたいというのである。これは第三部のひとつの大きな節目をなす場面であって、女房の改心が現世における悪妻から良妻へという次元を超えたものであることを聴衆に強く印象づけるのである。

夫は、この女房の言葉に改心が本物であることを知り、おおいに喜んで自分と女房双方の親族一同を呼んで妻との和解を宣言し、小屋を取り壊させるが、女房はいまだに前の主張を繰り返して中に留まることを望む。ここで再び司祭が登場して、これも第三部の節目となるような言葉で説得をする。

240 dô gienc der pfarrære dar
und bôt ir bî der gehôrsame,
als liep ir wære kristen name,
daz si gehôrsam wære ir man;
dâ tæte si gotes willen an.

すると司祭がやってきて
神への服従を盾にとり
キリスト教徒の名を汚さぬよう
夫の意に服従せよと命じた
それが神意にも叶うのだと

この女房は第一部に見たように、夫への服従という義務に反したがために、夫によって小屋に閉じ込められるに至ったのであった。その非を悟った女房は一生を小屋の中で贖罪に費やすことが、神への、そして夫への服従を破った自分のとるべき道だと考えたのであるが、司祭によれば、外へ出よという夫の言に従わないこともまた、夫への不服従であり、ひいては神への不服従につながるというのである。詭弁のような、また正論のようなこのひとことで、女房はついに小屋の外へ出るのである。

この司祭の言葉を謂わば「落ち」として、物語を閉じることも十分に可能であったように思われるのだが、デア・シュトリッカーはさらに改心後の女房の姿を描き継ぐ。女房は夫にこう訴える。

260 welt ir mich niht dar inne lân, 小屋の中での贖罪で

daz ich gestille gotes haz,	神の怒りを鎮めることが叶わぬなら
sô erloubet mir doch hie ûze daz,	どうかこの小屋の外で
daz ich got dâ mite êre	神を讃える術として
und übeliu wîp bekêre,	世の悪妻の改心をお任せください
265 daz kan ich nu wol geschaffen.	いまの私にはそれができるのです

みずからの苦い経験を生かして世の中の悪妻を改心へ導くことが、一度は背いてしまった神への償いの道であるから、不心得な女がいたら自分のところへ連れてきて欲しいというのである。これを聞いた居合わせた者たちは「平信徒も聖職者も／彼女の足元にひれ伏した」(266f.)とされ、また彼らはこの女房に対し「あなたこそ聖なるおかた」(285)という賛辞まで捧げて、第三部にはいって漂い始めていた宗教的色彩はさらに色濃いものとなる。そしてこの素晴らしい聖なる女房の噂は「国中に」(359)広まって、ひとびとはさながら「聖遺物」(393)をもとめるように彼女のもとへ押し寄せたとされている。

これにより物語は、ひとりの悪妻の改心譚という枠を越えた広がりを獲得する。ひとりの改心が描かれるだけでも他の作品にはない一種の重層化であったのに、さらにこのことによってこの作品は、物語構造の重層性を増している。敢えて小説の通例を破ってまでこうした構成をとったデア・シュトリッカーは、いったいどのような意図をそこに秘めていたのであろうか。

5.

問題は次の三点に整理できる。

1. 女房を絶望状態のうちに放置せず改心に至らせるのはなぜか。
2. 改心の唐突さをどう理解するか。
3. 改心後の女房が他の悪妻の救済に乗り出すのはなぜか。

第一の点に関してはまず、この設定が作者の周到な意図をもってなされたものであることを確認しておかなくてはならない。改心のありさまとその後を描く物語の第三部に、それまでの第一部第二部をあわせた行数の約三倍の長さが費やされていることはすでに述べた。特に第一部については、多くを聴衆との共通理解

に負う形で、きわめて簡潔な表現がなされていた。第二部ではやや細かな描写も現れるが、それらは物語に最小限のリアリティーと娯楽性を付与するためのものに限られている。絶望という結末に至る道筋は不必要な曲折を極力避けて、まっしぐらに辿られる。改心以後の第三部の分量と比べると、それまでの部分は《その後》の女房の聖なる善女への変容を導き出すための道具立てにすぎないようにさえ思えてくる。

また、目をシュトリッカーから転じて、当時すくなくならずなされた「悪妻」に関する言説に向けてみても、およそ改心する悪妻の姿は見当たらない。例えばまえにも引いたペルトルト・フォン・レーゲンスブルクの説教のなかにも悪妻は多数登場するが、そこではさまざまな悪妻ぶりが分析されたうえで、それぞれ地獄墮ちの断罪がなされるだけである。また、いわゆるアンブラーザー写本所収の作者不祥の悪妻譚では、¹⁷⁾ 女房は徹頭徹尾夫に対して戦いを挑み、暴力を加え続ける。いずれの場合も悪妻は、悪妻であることによって関心の対象となるのであって、そこに改心という要素が入り込む余地はない。ペルトルトの説教の場合には、それが説教であるという性格上、聴衆のなかの悪妻に改心を促す意図があるはずなのだが、それが陽画となって現れることはない。アンブラーザー写本の悪妻譚にいたっては、宮廷文学が貴婦人をその理想像に形象化したのと正反対に、悪妻というものをその《理念型》において、あるいは《負の理想像》のうちに描くことを目指しているかの如くである。¹⁸⁾ これが当時おこなわれた悪妻譚の一般的指向であった。

したがって、『閉じ込められた女房』でデア・シュトリッカーがおこなう改心の描写は、残酷な結末をもって一話の結びとする彼自身の小話作法にも、時代の一般傾向にも反する、意図的な試みであるといわねばならない。

むしろこの物語のはこびは、《聖者伝》を思わせるものである。犯した罪を乗り越え、試練をくぐって聖者が誕生するさまを描くことを目的とする《聖者伝》であれば、その変容の瞬間とその後とが描かれるのは当然である。たしかにまた、われわれの物語の第三部には宗教色が漂い、「聖なる」という語彙が繰り返し用いられていることも、さきに見たとおりである。デア・シュトリッカーは、意識してこの物語に《聖者伝》のころもを着せているようである。もしそうだとすれば、それによってデア・シュトリッカーが得んとする物語上の効果とはいかなるものなのだろうか。

問題は、小話文学の本質とかがわる。小話文学の本質をなす二大構成要素は、

《笑い》と《教化》であるとされる。¹⁹⁾ あらゆる理想から程遠い人間の生の現実を、その愚かしい紊乱のうちに描く作者が抱く目的は、描かれた状況の愚かしさによって聴衆の笑いを誘いながらも、それを笑うことで、聴衆がみずからの生の中にも存在しうる同様の愚かしさを認識し、より賢明な生き方を選択できるように導くことである。聴衆の側におけるこの認識作業は、通常、物語が語り終わられたときに、それが十分に効果的に問題のありかを浮かび上がらせることに成功しているならば、聴衆ひとりひとりのこころのうちでその認識能力に応じて個別に行われるべく期待されるものである。²⁰⁾ また、場合によっては、聴衆が物語からどのような教訓を汲み取るべきかを、より直接的に指示する「活用手引き」(Nutzanwendung) が末尾に付されることもある。

この《教化》への意志に注目するなら、聖者伝風に理想的な改心のありさまを聴衆に提示することには、聴衆自身がしたがうべき模範を作品内に用意することで教化の実現を図ろうとするものであるとの意味づけができるかも知れない。小話が一般にとるショック療法的教化法とは別の、ひとつの可能な方法として、たしかにそれも考えられなくはない。しかし、どちらの方法がより効果的であるかという段になると、単に改心を描くというだけでは、むしろ残酷な結末を突きつけるほうが、聴衆の心を動かすこと大ではないかという疑問がぬぐいきれない。デア・シュトリッカーのねらいをはかり知るには、この聖者伝風物語の構造をさらに検討していかななくてはならない。

その鍵は、第三点として問題にする女房の改心後の使命にあると考えられるのだが、その考察にはいる前に、第二の問題、改心の描写法に触れておきたい。これも、第一の問題と決して無関係ではないからである。

女房の改心が、「悪魔」と「聖霊」の入れ替わりとともに瞬時に完結することは前に指摘した通りである。だが、なぜ、ここで女房が急に改心にいたるのか、その間の理由づけは決して十分になされているとはいえない。小屋の中でひどい食事、窓ごしに楽しく時を過ごす夫の姿を見せつけられることで募る疎外感、そして親族にも見切りをつけられたことによる社会的孤立、こうした進展のうちに女房が次第に絶望状況に陥っていくさまは確かに描かれている。しかし、そこから改心へ至る道のりは決して直線で結ばれるほど必然的なものではない。絶望と改心とを結ぶ中間項が欠落しているという印象をわれわれは禁じ得ない。女房の心理の動きを跡づけるその中間項なしでは、物語は聴衆にとってもあまりにリアリティーを欠くものとなりはしないか。

しかし、これをもってデア・シュトリッカーの描写に不足ありとするのは、近代リアリズムの観点からする不当な非難であると言わねばならない。そもそも何をもってリアルなものとするかの観念が中世と近代とでは根本的に違っている。中世文学の本質と形式を論ずる著作の中でH・プリנקマンはこの問題について次のように述べている。「中世の人間にとって真にリアルなものとは、神のうちにやすらう客観的現実そのものに他ならない。(中略) この客観的現実とは、われわれがこの目で見たり経験したりする世界のなかの感覚的、特殊、個別なものではなく、理念的、典型的、普遍的なものである」²¹⁾ と。このような現実観に立つ文学表現に、人間個人の心理描写が占めるべき場所はない。プリנקマンはそれを「心理的動機付けの欠如」と呼び、次のようににつづける。「心理的動機付けというものは常に、人間の立場から人間のためにする説明の試みであって、主観をもごとの妥当性の構成要素とみなす世界観を前提としている。中世という時代は出来事を人間から独立的に描く。(中略) 受け取る側も、《どのように》あるいは《なぜ》と問うことなく、何かが起こることだけで満足するのだ。」²²⁾

デア・シュトリッカーが女房の改心を描こうと決めたとき、彼が改心前と改心後の女房の姿をそれぞれ「悪魔」と「聖霊」によって象徴される「典型」として描き、その間の心理描写にかかわることがなかったのも、こうした中世人の思考法、文学観のもとでは、むしろ自然な事であったと考えられるのである。また、聴衆の側も、プリנקマンの指摘どおりに、《どのように》《なぜ》とことさらに問うことがなかったとすれば、この女房の徹底した改心ぶりも、物語の不自然な飛躍ではなく、およそ改心が起こった以上そこからの自然な展開と受けとめられたに違いない。すなわち、一見すると不自然に思われるこの急転直下の改心ぶりに必要以上に目を奪われては、かえって作者の意図をさぐる作業の妨げになりかねないことを、ここで指摘しておきたかったのである。

さて、いよいよ最後の問題である。女房が国中の悪妻の救済を使命として引き受けるのはなぜなのか。この点については、改心した女房にばかり目を向けていたのでは答えを見つけることはできない。むしろ、これによって物語のなかへとりこまれることになる「国中の」ひとびとのほうに注目したい。

女房が小屋から出てすぐ、ほかの悪妻を改心させることを務めとしたいと宣言する場面のすぐあとに、つぎのような一節がある。

sumeliche sprächen: „mir hât diu mîn 誰かれが云うには「拙者も女房には

	sô vil ze leide getân,	ほとほとひどい目にあっておる
290	si muoz ouch lîhte hie bestân,	あ奴をここに連れて参り
	daz ir mirs guot machet. “	性根を直して貰うとしよう」
	des wart dâ vil gelachet	これには騎士も奥方も
	von rittern und von vrouwen.	声をそろえてみな大笑い

また、物語の終わり近くにはつぎのようにある。

	dô diu vil rehte wârheit	この奥方が閉じ込められた
370	von dem gadem wart geseit,	小屋にまつわる真実を
	dâ diu vrouwe inne gewesen was	耳にした悪妻たちは
	(.....)	(.....)
375	dô gedâhte ein ieslich übel wîp:	一人残らずこう考えた
	„ich hæte verlorn mînen lîp,	「あんな小屋に入れられては
	ob ich quæme in daz gaden.	とても生きてはおられまい
	der noete wil ich mich entladen.	そんな苦しみは真つ平御免
	ich wil guot sîn und reine. “	いい女房になるとしよう」
380	des gedâhtens alle gemeine,	国中の女たちが
	die dâ wâren in dem lande.	みなこのように考えた
	beide ir sünde und ir schande	小屋の暮らしの恐ろしさに
	die vermitens alsô sêre,	恥ずべき罪のおこないは
	daz ir übele und ir unêre	きっぱり縁を切り捨てて
385	vor vorhten alsô gar verwwant,	不埒な心も消えたので
	daz man niender ein wîp vant	国中どこを捜しても
	in dem lande, diu übel wære.	悪妻の影はなくなった

一つ目の引用で、自分の女房も何とかして貰いたいものだとこぼして失笑を買う夫、これは、デア・シュトリッカーの話を聞いている男性聴衆の姿ではあるまいか。また、第二の引用で、あんな恐ろしい小屋に閉じ込められるよりはと良妻に変身する女たち、これは女性の聴衆を念頭においたものといえないか。

すなわち、デア・シュトリッカーはここで、みずからの物語に聴きいっているものたちを、男も女も、物語そのものの中へ引き込んでいるのだと考えることが

出来るのである。もしそれがあたっているとすれば、そもそも問題の女房が「国中の」悪妻の救済に乗り出すという設定も、物語の中へ聴衆を取り込むという物語構造の重層化のための戦略として導入されたものであるとみることが可能となる。

その意味で、この二つの引用箇所は非常に興味深い。「拙者も女房には」云々と切りだす男が居並ぶ騎士とその奥方たちから浴びせられる「大笑い」は、悪妻に手を焼く夫たちが当時の社会に蔓延していたことを十分に踏まえたうえで、予測される聴衆の反応を取り込んだものと見ることができる。また、もう一つの箇所でも、世の悪妻たちの改心の理由が小屋の暮らしへの恐怖にもとめられ、直接にはさきに改心を遂げた女房の聖なる感化力のせいにはされていないのは、現実の悪妻たちの御し難さを知り抜いた上で、結局は相手に恐怖心を与える方法でなくては埒があかないとも言いたげである。

さらにもうひとつ、デア・シュトリッカーは、改心後の女房に感服した聖職者たちに次のような趣旨のことを言わせている。すなわち、自分たちもこれからは、悪妻に悩む夫がいたらその女をこのお方のもとへ連れて来させて曲がったところを直してもらうことにしよう、と（352ff.）。悪妻を正道へ導くという本来自分たちのものである務めを放棄し、ひとえに改心後の女房の感化力にたよらせるとは、世の中の無能な聖職者たちに対する何と痛烈な皮肉であろうか。

かくして聴衆たちは、物語の中に取り込まれた自分のすがたと対面させられることになるのである。

『閉じ込められた女房』という作品は、はじめはごく普通の小話のように見せておきながら、聖者伝風の第二の物語たる改心譚によって構造を二重化し、さらにその行きつくところ、さながら聖人と化した女房の感化力を媒介として、国中の人間を巻き込んで一段の重層構造をつくりあげている。そのめざすところは、現実の聴衆を巧みに作品内に取り込んで、聴衆自身の目の前に突きつけて見せることであった。

改心の物語を聖者伝に終わらせるには、デア・シュトリッカーはあまりに現実を知り過ぎていたということであろうか。また、そうした現実認識の眼差しが物語をはしばしにおいて下支えしていればこそ、後半部に漂う宗教色も作品全体を説教臭や教条的硬直に陥らせるまでにはいたっていないのである。

典型的悪妻が伝説的聖女にかわるさまを傍から見ていたつもりの聴衆は、いつしか目の前に鏡を突きつけられていることに気づかされる。そこに映るのは相も

変わらず愚かで、醜い自分たちの姿に他ならない。《笑い》とならぶ小話の根本目的たる《教化》の効果という見地からも、この重層構造は、なかなかによくできた語りの工夫であると言ってよかろう。

テキスト

本稿で使用したデア・シュトリッカーのテキストはつぎのとおりである。

Der Stricker. Verserzählungen I. Herausgegeben von Hans Fischer.

4., revidierte Auflage besorgt von Johannes Janota. Tübingen 1979.

また、次のものも随時参照した。

Die Kleindichtung des Strickers. Gesamtausgabe in fünf Bänden.

Herausgegeben von Wolfgang Wilfried Moellenen. Göppingen 1973-1978.

註

- 1) ジャンル名としては他に、やや広義の概念として、Kleindichtung, Kleinepik, Versnovelleなどの名称があり、また一方 Märe の下位概念である Schwank が伝統的に広く用いられてきた経緯もあって、様々な名称が混在して使用されているのが現状である。ジャンル論に関しては、次のものを参照。Hanns Fischer: Studien zur deutschen Märendichtung. 2. Aufl. Tübingen 1983. /Joachim Heinze: Märenbegriff und Novellentheorie. Überlegungen zur Gattungsbestimmung der mittelhochdeutschen Kleinepik. in; Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur CVII(1978), H. 2, S. 121-138.
- 2) Fischer a. a. O. S. 62ff.
- 3) Vgl. Helmut de Boor: Die deutsche Literatur im späten Mittelalter. Zerfall und Neubeginn. Erster Teil 1250-1350. 4. Aufl. 1973 (Geschichte der deutschen Literatur von den Anfängen bis zur Gegenwart, von Helmut de Boor und Richard Newald. 3. Bd. /1. Teil), S. 228f.
- 4) G. Rosenhagen: Der Stricker. in; Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon. hg. v. Karl Langosch, 4. Bd, Berlin 1953, Sp. 293f.
- 5) デア・シュトリッカーの小話における「賢明さ」の問題は広く論じられてきたが、なかでも、それを当時のドミニコ会の教義との関連づけて中心的に扱った次の論文は多くの示唆に富んでいる。Erhard Agricola: Die Prudentia als Anliegen der

- Strickerschen Schwänke. Eine Untersuchung im Bedeutungsfeld des Verstandes. in; Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur, Bd. 77 (1955), S. 197-220.
- 6) ただしそれはあくまでも中世人の思考法及び文学表現にしたがった「典型」としての表現であり、今日的意味におけるリアリズムとは区別されなくてはならない。Vgl. Woldietrich Rasch: Realismus in der Erzählweise deutscher Versnovellen des 13. und 14. Jahrhunderts. in; Altdeutsches Wort und Wortkunstwerk. Halle (Saale) 1941, S. 195-211.
 - 7) いずれも上掲 Verserzählungen I 所収。それぞれのドイツ語タイトルと掲載頁は次の通り。Das erzwungene Gelübde. (11-21), Ehescheidungsgespräch. (22-27), Der begrabene Ehemann. (28-36), Das heiße Eisen. (37-50), Der Gevatterin Rat. (66-91).
 - 8) デア・シュトリッカーの場合、『強いられた誓約』の冒頭 Ein man sprach ze sinem wibe「とある亭主が女房に向かってこう言った」という形、およびそのヴァリエーションが好んで用いられ、詳細な人物設定は一切はぶかれることが多い。
 - 9) vrūmekeit (V. 72), wīse, biderbe (V. 326)
 - 10) ミッタイス＝リーベリッヒ著『ドイツ法制史概説』改訂版 世良晃志郎訳 創文社 1971年 31頁参照。
 - 11) Berthold von Regensburg. Vollständige Ausgabe seiner Predigten mit Anmerkungen von Franz Pfeiffer. Berlin 1965. Bd. 1, S. 325.
 - 12) この作品は Verserzählungen I には収録されていない。テストは上掲 Moelleken の版による。„Von bösen Frauen“ Bd. 4, S. 108-141.
 - 13) ただし表題はあくまでも後世の人間によって便宜上つけられたものにすぎない。他の作品についても同じ。
 - 14) Vgl. Moriz Heyne: Deutsche Hausaltertümer von den ältesten geschichtlichen Zeiten bis zum 16. Jahrhundert. 1. Band Wohnung, S. 95f.
 - 15) この親族共同体の結束については、ミッタイス＝リーベリッヒ前掲書の他、たとえば次の文献を参照。マルク・ブロック著 『封建社会』新村猛他訳、みすず書房、1973年。第一巻、114頁以下。
 - 16) Franz Brietzmann: Die böse Frau in der deutschen Literatur des Mittelalters. Berlin 1912. S. 105.
 - 17) „Von dem übeln wibe“ hg. v. Karl Helm, Tübingen 1955.
 - 18) Hans Fischer はあるところで „Stilisierung nach unten“ という表現で同様の事実を指している。Hans Fischer: Schwankerzählungen des deutschen Mittelalters. München 1967. S. 329.
 - 19) Vgl. Helmut de Boor, a. a. O. S. 229f.
 - 20) 小話の及ぼすべき効果に聴衆の認識能力が不可欠の要件として関わっていることにつ

いては、次のものを参照。Hedda Ragotzky: Gattungserneuerung und Laienunterweisung in Texten des Strickers. Tübingen 1981. bes. S.133ff.

- 21) Hennig Brinkmann: Zu Wesen und Form mittelalterlicher Dichtung. 2. unveränderte Auflage, Darmstadt 1979. S. 82.
- 22) ebenda, S. 85.